

個人は地域の英語に対してどのような言語管理を行っているか —シンガポール、マレーシア、フィリピンのケース・スタディから—

How Do Individuals Cope with Individual Language Management with Local English?

Case studies in Singapore, Malaysia and the Philippines

石田 由美子

ISHIDA Yumiko

キーワード：言語管理、個人言語管理、席次管理、地域の英語、管理プロセス

Keywords: language management, individual language management, status management, local English, language management process

Abstract

The principal focus of this paper will be on status management within the “Individual language management” such as what the problems are in the languages for each individual and how she or he copes with those problems. From a standpoint of Language Management Theory, the analysis of the interviews conducted in Singapore, Malaysia, and the Philippines, which are so called “Multi Lingual Societies”, reveals how the individuals actually cope with their language problems and what management processes they apply to; simple adjustment or through complex management.

1. はじめに

本稿は、個人がどのような言語管理を行っているのか、すなわち個人言語管理¹⁾について考察を試みるものである。ここで言う「個人言語管理」とは、個人が言語に関して何を問題とし、さらにその言語問題にどのように対処しているかを総合的に表している。個人言語管理の類型としては、石田(2006:12-13)で席次管理、実体管理、普及管理、習得管理、世代差についての管理、民族とその文化についての管理、と6つの類型²⁾を挙げているが、本稿ではその1つである席次管理、すなわち国内に存在する複数の言語に対してある特定の社会的機能を与えていく管理のうち、特に地域の英語に関して個人が行っている言語管理について取り上げることとする。

従来、言語計画(または政策)については、主に国の政策や教育システムの類型やプロセス、その問題点などを扱った研究³⁾が行われてきたが、そのプロセスに参加する個人が

どのような立場をとっているかという研究は、あまりなされてこなかった⁴⁾。しかし、言語計画（政策）が最終的には一人一人の個人を対象とし影響を与えるものであることを考慮すれば、個人がそれぞれに自身の言語を管理し、また言語計画（政策）に対してもさまざまな対応を行っていること、すなわち本稿で述べる言語管理を行っているであろうことは、容易に想像できる⁵⁾。

そこで本稿では、複数のレベルで言語管理が行われているとする言語管理理論に基づき、実際に個人のレベルでも言語管理が行われていることを具体的な例を用いて明確にし、同時に個人言語管理の行われ方については言語管理プロセスを用いて分析、考察した。個人のレベルに焦点をあてて、国・政府レベルと同様（もしくはそれ以上）の管理が行われていることに注目したことは、本稿の大きな特徴である。なお、本稿では個人のレベルで言語管理を行っていること、さらに行われた管理のプロセスについてその一端を明らかにすることが目的であり、調査対象国およびコミュニティにおける量的な研究ではないことを断っておきたい。

2. 調査概要

本稿で取り上げる調査の概要は以下のとおりである。

2.1 調査対象国

本稿で用いるデータはシンガポール、マレーシア、フィリピンの3カ国で行った半構造化インタビュー調査から得られたものである。この3カ国を選択した理由は、植民地時代に英語が導入されたなどの社会的・歴史的な共通点を持ちながら1970年代以降の「国・政府レベル」の言語管理に大きな相違点があること、したがって国・政府レベルと個人レベルの言語管理について相互の影響を考慮し易いこと、3カ国ともに複数の言語が存在する多言語国家であること、などからである。地域の英語に関する対象国の国・政府レベルの言語管理については、例を挙げる際にそれぞれ記述する。

2.2 調査方法

調査はそれぞれの対象国で行い、調査方法は半構造化インタビュー（英語）を用いた。まず2001年2月から3月にかけて、中国系シンガポール人計6名に対して調査を行った。マレーシア調査は2002年9月から10月にかけて行い、代表的な3民族であるマレー系、

中国系、インド系から各6名ずつ計18名を調査対象者とした。最後に2004年7月から10月にかけてフィリピンで調査を行い、フィリピン語の基礎であるタガログ語母語話者3名、タガログ語非母語話者5名の計8名を調査対象者とした。分析の対象は、32名の調査対象者全員に行った共通の質問(後述)に対する答えであり、全調査対象者から答えを得たが、本稿ではスペースの関係上、14名の調査対象者を例として取り上げる。

インタビュー記録の文字化にあたっては、各国の母語話者による校正が行われている。分析にあたっては、インタビューで述べられた調査対象者の言語的背景を考慮するとともに、対象国で行われてきた国・政府による席次管理、実体管理、教育システムなどの言語管理について十分に考慮した。なお、本稿で例を挙げた調査対象者の一覧は第1表で示した。調査対象者を示す記号のうち最初の文字Sはシンガポールを、Mはマレーシアを、Pはフィリピンを、次のcは中国系、iはインド系、mはマレー系、tはタガログ語母語話者、nはタガログ語非母語話者を示す。最後の数字は国毎に通し番号としている。

番号	調査対象国	調査対象者	性別／民族	年 齢
1	シンガポール	S c 1	男性／中国系	20 代
2	シンガポール	S c 2	男性／中国系	50 代
3	シンガポール	S c 3	男性／中国系	50 代
4	マレーシア	M c 1	女性／中国系	20 代
5	マレーシア	M c 2	女性／中国系	20 代
6	マレーシア	M c 3	女性／中国系	50 代
7	マレーシア	M i 4	男性／インド系	50 代
8	マレーシア	M i 5	男性／インド系	50 代
9	マレーシア	M m 6	男性／マレー系	50 代
10	マレーシア	M m 7	女性／マレー系	50 代
11	フィリピン	P t 1	女性／タガログ	20 代
12	フィリピン	P n 2	女性／非タガログ	20 代
13	フィリピン	P n 3	女性／非タガログ	20 代
14	フィリピン	P n 4	女性／非タガログ	50 代

第1表 調査対象者

2.3 調査内容

インタビューでは11～12の質問項目を用意したが、本稿で取り上げるのは対象国で話されている英語⁶⁾についての質問である。シンガポールでは「シングリッシュを話せますか。シングリッシュは悪い英語だと思いますか」、マレーシアでは「マレーシア英語というものがあると思いますか」、フィリピンでは「タグリッシュを知っていますか。タグリッシュをどう思いますか」という質問をそれぞれ行った⁷⁾。これらは、席次管理についての質問の1つで、英語とその問題について何か述べているか、特に英語のヴァリエーションについてどういう言葉で何を述べているか、に注目したものである。質問はインタビューの中ごろに行われ、調査対象者はインタビューにも調査者にも慣れたと思われる頃である。インタビュー全体にかかった時間は約30分から80分であった。

なお、インタビュー記録を個人言語管理のデータとして扱うにあたって稿者は「言説」という概念を用いている。これは以下の理由からである。

インタビューで述べられたことが常に調査対象者の言語管理を表しているとは言えない。個人は、言語そのものに関する規範以外にも、言語に関して思想や宗教、エチケットなどに拠る規範を持っていると思われ、場合によって用いる規範が違っている可能性があるからである。例えばあるマレーシア人の調査対象者について、普段はほとんど英語を使っていると答える一方で、国語としてのマレー語を強く擁護する発言が見られた。稿者はこのマレー語に関する発言を、言語に関する規範ではなく、思想という規範に拠った発言であるととらえた。このことからインタビュー記録をデータとして個人言語管理のプロセスを見るためには、インタビューで述べられたこと（表層）が個人言語管理の規範（稿者はこれを「深層個人言語管理」としているが、本稿では単に個人言語管理とする）に従って述べられたことか、思想や宗教など他の規範に従って述べられたことかを分ける必要が生じると言える。稿者はこれを「言説」（＝イディオム⁸⁾）という概念を使用することによって振り分けている。本稿では、分析対象とするインタビュー記録は個人言語管理からの発言である必要があり、実際その条件を満たしたインタビュー記録をデータとして使用した。インタビュー記録をどのように個人言語管理から来たものと、それ以外のものに分けているかについては、石田（2004、2006）に詳しい。

3. 個人言語管理（席次管理）の例

ここでは国別に国・政府レベルの英語に関する言語管理について述べた後、個人言語管理の例を挙げ、その内容を管理プロセス⁹⁾(①逸脱、②留意、③評価、④調整計画、⑤調整計画の実施)の観点から記述する。言語管理における管理プロセスの1つのパターンとしては、国・政府、個人などの各レベルがそれぞれに持つ自身の言語に関する規範と違う規範に接した場合(逸脱)、それに気づくかどうか(留意)、気づいた場合問題であるかどうか(評価)、問題であるかどうか(調整計画)、その解決策を実際に行うかどうか(調整計画の実施)が挙げられる。もちろん常に全プロセスが行われるわけではなく、プロセスの実施のされ方についても個人や場合によって異なることが予測される。以下に挙げる例では、例ごとにそのプロセスを示している。なお、調査者の質問は太字イタリックで示している。また……は前略、中略、後略を示す。

3.1 シンガポールの例

シンガポールはマレー系、中国系、インド系などからなる多民族国家であり、国・政府レベルの基本的な言語に対する姿勢は多言語使用政策である。マレー語(国語でもある)、標準中国語、タミル語、英語の4言語を公用語としているが、英語は行政や教育の言語とされている。政府は英語(英国規範)を実質的な第一公用語としている理由を、英語の実用的な価値(世界で通じる言語)と中立性(母語話者がいない)にあるとしている。英語は教育、マスコミなどを通じて広く普及しているが、一方でアクセントや文法、語彙に標準英語とは異なる部分を持つシングリッシュ(中村1990)も存在している。政府は、シングリッシュを英語であると理解してシングリッシュしか話さない人々の増加を問題であるとして2000年から“Speak Good English Movement”というキャンペーンをはじめ、理解される英語を話すよう国民に呼びかけている。管理プロセスで言えば、政府の言語管理としては、人々がシングリッシュのみを話すことは問題であり、その解決のためにキャンペーンという調整計画を実施していると言える。

シンガポールの調査対象者に行ったのは、「シングリッシュを話せますか。シングリッシュは悪い英語だと思いますか」という質問である。調査対象者は計6人であったが、全員がシングリッシュという言葉を知っており、存在の認識があった。シングリッシュに対する評価は肯定も否定もあったが、肯定的評価をした対象者も場合によっては問題があるとしており、シングリッシュが言語管理の対象になっていることがわかる。

例1 : Sc1の場合

Sc1の答えは非常に簡潔であった。シングリッシュに対して肯定的な評価をしており、悪い英語であるとは全く思っていない。しかしシングリッシュはリラックスしている時に使うものであり、「いつ」使うかについては管理が必要であると述べている。

Can you speak Singlish?

Haha, I thought that I am speaking Singlish. Ha ha. Can I speak Singlish? I'm sure you can. I think at times when you are really very relaxed you will speak Singlish.

Do you think Singlish is bad English?

Singlish is bad English? Singlish is a form of English that you use to converse with people around you. No I don't think it's bad English. You just need to know when to use each.

シングリッシュはどのようなものかという質問に対して

What kind of Singlish. I think the Prime Minister said before you must know when to use the right English to speak. I think that Singlish is fine as long as you both can know understand what you are trying to say.

ここでSc1には英語とシングリッシュは別なものとの明確な認識があり、話す時、場合についてそれぞれに規範を持っている態度が見られる。そしてシングリッシュの存在そのものには肯定的評価をしているが、使用する場合については調整計画の実施まで管理を行っていると言えよう。

例2 : Sc2の場合

Sc2は全体的に言語に対する管理が強い調査対象者である。シングリッシュについても、質問をする前から悪い英語がすなわちシングリッシュであると述べている。

英語の話題から続けて

……So, I mean, if the mother doesn't speak the proper English, by speaking English to the child it is imparting the knowledge of wrong English. Singlish.

Can you speak Singlish? And do you think Singlish is bad English?

What kind of question? I cannot give good answer. Because, I, I just hate Singlish.

So you've asked me, can I speak. It means I'm forced to speak something I don't

like.

シングリッシュの特徴としては、他の言語の単語を使用したり、英語の文とは違った構成を使用したりといったことが挙げられるが、Sc2はこのようなことを言語の乱れと考えているようである。したがって、Sc2のシングリッシュに対する言語管理は、シングリッシュに対して非常に強い否定的評価を行い、自身としても使わないといった調整計画の実施まで行っていると言えよう。

例3 : Sc3の場合

Sc3はシングリッシュについて良し悪しの問題ではなく、感情を表すことができ（上手く）コミュニケーションできるものであるとしている。

Do you think Singlish is bad English?

No, it's not bad or good, it's just convenient, communicate, you can express your feelings, I think communication, that's it, you know. I mean it depends on the environment, I mean here with you, I speak proper English. I don't speak Singlish with you. But with someone from outside, I can't speak Singlish, it's okay, I mean it doesn't matter.....

.....Also it depends who you are with if you are with a minister. But normally, I think common people you can use Singlish, it's more comfortable, plus I think more people understand, more people understand Singlish than the official English

ここでSc3は、英語は外国人や地位の高い人に対して、シングリッシュは同国人というようにそれぞれに別の役割をあてている。そしてその役割によって相手、場所などの環境について規範を持っているようである。Sc3もシングリッシュに対して肯定的評価を行いながら、一方、その使用状況については調整計画の実施まで（調査者に対してはシングリッシュを使わないなど）言語管理を行っていると考えられる。

今回の調査対象者については、まず全員がシングリッシュに対してその存在に認識を持ち、言語管理の対象としていると言えよう。シングリッシュの英語の規範からの逸脱、留意については、全員に共通しているが、評価の段階ではそれぞれが自身の規範に照らして個人として肯定もしくは否定的評価を行っていることがわかる。また肯定的評価を行っている場合でも、使用する場所、相手、場合などについて規範を持ち、初めから逸脱を回避

するような調整計画の実施を行っていた。否定的評価を行っている場合もシングリッシュを使用しないという調整計画の実施まで管理を行っていたと言えよう。

3.2 マレーシアの例

マレーシアはブミプトラ（マレー系、先住民族）、中国系、インド系などからなる多民族多言語国家である。国の統一は1つの言語を使うことによってなされるという原則に従い、マレー語が唯一の国語であり公用語であるとされている。教育言語もマレー語が基本である。英語は第二言語としての地位を与えられているが、実際には社会的機能も含めてマレー語と同等の地位を得ており、特に中上流の非マレー系では以前からコミュニケーション言語となっている(Asmah 2000: 243)。政府も近年英語の重要性を認識し、1990年代からは英語の普及を進めているが、教育制度を含めた英語学習環境はまだ不備であると言える。現在の政府の英語に対する言語管理としては、英語そのものに対するというよりも、教師の養成など学習環境の整備が中心であると言えよう。したがってマレーシアの国・政府レベルにおいては、現在の英語の普及・習得状態は問題であるとの認識はあるが、調整計画およびその実施の段階ではまだ組織的・効果的な言語管理が十分に行われているとは言えず、途上の段階であると思われる。

マレーシアの調査対象者に行ったのは、「マレーシア英語というものがあると思いますか」という質問である。調査対象者は計18人であったが、マレーシア英語の存在自体を認識していない対象者もいれば、マレーシア英語の特徴を述べた対象者もいるなど、認識が様々であった。

例1: Mc1の場合

Mc1はマレーシア英語が存在するか、という質問に対して一言で答えている。

Do you think Malaysian English exist?

Not really.

Mc1は中国系ではあるが、普段から英語をよく使用している調査対象者である。英語を日常的に使う環境ではあるが、マレーシア英語の存在は認識していないと言えよう。Mc1にとってマレーシア英語は言語管理の対象にはなっておらず、したがって管理プロセスも生じていない。

例2: Mc2の場合

Mc 2にとっては、マレーシアの言葉を英語の中で使うことがマレーシア英語である。

So do you think that Malaysian English exists?

Malaysian English exist? I think so, ya, Malaysian English exist because people in Malaysia like to speak with new Malaysian words inside of English words, and then if foreigners were to listen to us, if we speak Malaysian English I don't think they can really understand

Do you think ...you speak Malaysian English?

I try not to speak Malaysian English. I don't think I speak very Malaysian English, but I have the normal Malaysian "le' s or le' s" ...or whatever behind and sometimes also when I speak English you tend to speak in very weird slang, ya, like not first slang, just simply speaking, ya

Mc 2はマレーシア英語は話さないようにしているが、語尾にleをつけたり、スラングを使って話すことがあると述べている。ここでMc 2はマレーシア英語の存在を認めて問題であると認識し、なるべく話さないようにしているという調整計画の実施まで行おうとしている。Mc 2にとってマレーシア英語は言語管理の対象となっていると言えよう。

例3: Mc 3の場合

マレーシア英語についてMc 3はそれをマングリッシュと呼ぶといい、普段は使わない語彙や、母語を入れたりしてよりリラックスするものだと言っている。

Do you think Malaysian English exist?

Yes, just as they say they are Singlish, we have Manglish.

Do you see the difference from any other English?

Oh yes. We have a specific Malaysian variety of English.

Specific Malaysian...

I would say it is not the regular Malaysian variety of English as spoken by the people in a social setting, we may revert to more vocabulary that is not of splendid usage, may be there are some influences from your mother tongue, they inject that into your speech to feel more relaxed.

Do you use Manglish sometimes?

Yes. I find it is a very delightful way of getting around and talking with friends

… it's different.

Mc3は通常のマレーシア英語とマングリッシュは違うものであると認識し、Mc3自身は使い分けているように思われる。今回の調査対象者のなかでマングリッシュという言葉を使ったのはMc3だけであった。Mc3にとってマングリッシュは言語管理の対象であり、肯定的評価を行ってはいるが、使用する場合については規範を持ち、話す相手を選ぶという調整計画の実施まで管理を行っていると言える。

例4：Mi4の場合

Mi4は、現在は10人中1、2人しか英語を話さずマレーシア英語が存在するとは思えないとしている。

マレーシア英語は存在するかという質問に対して

……All speak English, so exist. So everyone can speak English I, you go there out of 10, 9 can speak English, now out of 10 maybe 1 or 2, other way around is it? I do not whether I can accept that view. If you ask me at this moment no, maybe 5 years time maybe because we are not pushing English, we started a few years back, now there are some people coming forward to learn English. Now, I do know think, in future maybe yes, but now I do not accept.

ここでMi4が述べていることは、マレーシア英語というのはマレーシアである程度英語が普及した状態において存在するものだということである。Mi4にとって現在、マレーシア英語は存在せず、したがって言語管理の対象にはなっていない。マレーシア英語というものに対して規範を持っているが、その規範を満たすものがまだ存在していないという状態であると言える。

例5：Mi5の場合

Mi5はマレーシア英語の存在については、認識している。

It is often claimed that Indian English is one of the varieties of English. So do you think Malaysian English exists?

Yes of course. We… Malaysian English, as we speak, many words are from Malaysian English. Then sometimes we also, Malay works by borrowing from the English language. Malay. The structure also sometimes they go like Malay structure. And then sometimes mix Malay Chinese and Indian, they mix and talk. Mix the structure. This we call

Malaysian English.

What do you think about the Malaysian English?

Well the grammar I can follow pretty well, so the language is only different from. Only the talking and writing, we write, but only in talking we use this. Because I feel, I'm from Tamil school, and mother tongue is Tamil. Definitely I have Tamil influence in my thinking so I often think in Tamil and I talk, in English my sometimes be like Tamil. My pronunciation...

Mi5は書き言葉と話し言葉を別々に認識していて、マレーシア英語というのは話し言葉について存在するものであること、書き言葉における英語の文法には問題がないと思っている。またこのときの口調などからも、マレーシア英語については、特に肯定的な評価も否定的評価も行っておらず、調整計画やその実施についても言及していない。したがってマレーシア英語についての管理プロセスは留意の段階までであろうと思われる。

例6 : Mm6 の場合

Mm6はマレーシア英語については、よくわからないと述べている。

Have you ever heard of Malaysian English?

Malaysian English. I didn't heard about that, sorry to say that I don't know about it. Maybe maybe Malay-go ok le they made Malaysian English maybe they create own, Malaysian create their own English.

Maybe.

Malaysian creating their own talking of English maybe, but we don't mix with them, we don't know about that, I am not sure.

Mm6はマレーシア独自の英語が作り出されていたとしても、そのことに関して否定的な評価は行っていないようである。マレーシア英語について一応は考えを述べているが、Mm6がマレーシア英語について特に何らかの管理を行っているとは思われない。

例7 : Mm7 の場合

次に挙げるMm7はマレーシア英語は主に発音の部分が違っていると述べている。

Do you think Malaysian English exists?

Yes, of course, Malaysian English when you talk Malaysian English, you talk in terms of I

would say more in terms of accents, in terms of pronunciation, we speak standard English with Malaysian accents, of course there are one or two words like the le you know these are certain like we call it expressions of that are influence you know it was influenced by Malay the first language, le is the very very unique when you talk about Malaysian English even Singaporean English, no le, yes le, can, can or not, sort of, in verbal, in what we call it English oral English you see, this is a direct influence from Bahasa Malayu or Bahasa Malaysia, but I would say that we talk standard English with Malaysian accents, yes yes all those thing as Malaysian English was grammar is affected and all that I don't think so, it is not like a dialect but I think more so in terms of pronunciation

Mm7には標準的な英語をマレーシアの発音で話しているだけであるとの認識があり、文法的にマレーシア英語と言える英語ではないと述べている。その発音の違いについても特に問題であるとする態度は見られず、したがって、マレーシア英語に関してMm7が管理を行っている様子はこの発言からは見られないと言えよう。

今回の調査対象者については、マレーシア英語に対しては、その存在の有無から認識に差があると言える。存在を認識していたとしてもマレーシア英語の意味するものは対象者によって違い、単純な語尾の違いから文法的な違いまで幅広く、マレーシア英語についての共通の認識は見出せなかった。このことは国・政府において英語に対する言語管理がまだ途上であるということの影響も考えられるだろう。言語管理のプロセスについても、調整計画の実施まで行っている例もあれば、マレーシア英語の存在に対する認識がないため言語管理自体が発生しない例もあり、この点についても対象者によって対応に大きな差がみられたと言えよう。

3.2 フィリピンの例

フィリピンは民族的には基本的にマレー民族であるが、中国、アメリカ、スペイン、アラブなどからの人々との混血が進んでいる国である。7,000以上の島から構成されることから言語的には多様で、主要言語だけでも8言語が存在するが、国語はフィリピノ語、公用語はフィリピノ語と英語である。フィリピノ語とは実際上は首都のマニラ周辺で使用されているタガログ語に近いが、形式上はフィリピン諸言語を統一した言語とされており、その規範および実体はまだ確定されていないものである。教育については二言語教育政策

をとり、フィリピン語および英語でそれぞれ決められた科目が教えられるとされているが、実施に関しては地域や経済格差が大きい。英語はかなり普及しているが、フィリピンで特徴的なのは、英語とフィリピン語の頻繁なコードスイッチが行われる事である (Pascasio 1984 : 122)。その理由について小野原(1998 : 66)が述べている点をまとめると、①1974年に開始された言語教育政策がフィリピン語と英語とのコードスイッチを推奨したものと大衆が受けとめたこと、②フィリピン語の使用領域拡大と地位の向上がある一方で知識語彙が不足していること、③英語が特定の使用領域と機能に限定されてきていること、などが挙げられる。フィリピンにおいては、二言語教育政策がその基本的な方針であると言えるが、その地理的・言語的複雑さなどから、国・政府レベルにおけるフィリピン語と英語のコードスイッチに関する言語管理は、問題の認識という点も含めて全体的に弱いと思われる。

フィリピンの調査対象者に行ったのは、「タグリッシュを知っていますか。タグリッシュをどう思いますか」という質問である。調査対象者は計8人であったが、タグリッシュの存在については、全員が認識していた。評価については、肯定も否定もあったが、否定的評価をしている対象者にしても実際は使用していると述べていた点が注目されよう。

例1 : Pt 1 の場合

Pt 1 はタグリッシュとはタガログ語と英語のミックスであり、便利なもので、自分たちが使っているフィリピン語はタグリッシュだと思っていると述べている。

You know Taglish?

Yah.

How do you think about Taglish? What is a Taglish?

Taglish, for me the mixture of Tagalog and English.

Mixture means?

You both use Tagalog or English...using that either the Tagalog structure or the English structure.

How do think that was, Taglish?

It's convenient, that's what we usually use. I think that's what we usually use the Filipino is I think for me is Taglish. Not really the Filipino but sometimes Taglish is the most common form of language we use during conversation.

Pt 1 は、タグリッシュの存在は認識しているが、そこに否定的評価はなくむしろ便利であると肯定的に評価している。Pt 1 の場合、タグリッシュは言語管理の対象とはなっているが、管理プロセスは肯定的評価の段階でとどまっていると思われる。

例2 : Pn 2 の場合

Pn 2 はタグリッシュを知っており、もし英語で表現できなければフィリピン語と英語を組み合わせて表現できると述べている。

Do you know Taglish?

Taglish?

How do you think about Taglish?

It' s okay. If you can' t express it in English then maybe you can combine it with Tagalog and English. ((laughter))

Pn 2 は書く場合については、すべてを英語で書くのが難しい場合は、フィリピン語を使っても、教授も考慮してくれると述べており、実際同級生はそうしているようである。

And you just think...

Yah, but in writing, if you write in English then its whole English, in Tagalog then whole Tagalog. But sometimes, professors also consider Taglish, if you can' t explain, if you can' t...if you' re having difficulties in explaining in English so you can make Tagalog and English, combination.

In speaking?

In writing.

Have you ever seen that?

Yes, to my classmate. ((laughter)) coz some professors they consider...they consider okay if you' re...if you' re having difficulties in writing English so you can have it in Taglish. Especially in essay, explanation.

Pn 2 は一応の規範を持っているようであるが、その規範に基づく管理は弱いものである。談話でも書き言葉でも、1つの言語ですべて説明できないという問題に対処するためにコードスイッチを行っていることを肯定している。英語とフィリピン語に関して明確な役割の認識が見られず、個人レベルでの言語に対する席次の管理は弱いと言えよう。

例3 : Pn 3 の場合

Pn3はタグリッシュを不純(粗悪)な英語であり、英語もフィリピン語も破壊するものであると思っている。しかし実際は自分もタグリッシュを話しているとも述べている。

Do you know Taglish?

Taglish...yes. ((laughter))

How do you think about Taglish?

Actually if I have a child, I won't tolerate my son or my daughter to speak Taglish because it...it's adulterated English, it destroys the English language and it also destroys the Tagalog language although...although...what do you call this?...you know the difference of Tagalog and Filipino now?

Yes.

Tagalog is used by the people there, and Filipino can...all over. So it also destroys the Filipino language so I'm not really into it. Although I speak Taglish ((laughter)), especially "okay na?", it's actually English and Tagalog... "okay na...", like that. "It's here na" ((laughter)).

ここでPn3はタグリッシュについて問題であると思っており、自分の子供が話すとしたら我慢できないなど、非常に強い否定的評価をしているにもかかわらず、つい使ってしまうと言っている、その自分の姿勢を笑いとともに述べている。否定的評価はあり、使わないという調整計画まではあるようだが、調整計画の実施まで進んではない。しかしPn3にとってタグリッシュは言語管理の対象にはなっていると言えるだろう。

例4 : Pn4の場合

Pn4はタグリッシュに好感を持ってはいないようである。

Yah. ((laughter))...So you know Taglish?

Oh yes, Taglish.

How do you think about Taglish?

You know, I do not like. Taglish is like...you are just pretending, you are "sosy", you know the word "sosy"? You feel like a socialite...in reality you are not, something like that...you speak in...as if it was an overacting for me. Yah, yah, I do not like that... "Oh come here and get my ..." something like that, I do not like it, I better speak straight English or straight Tagalog. Although sometimes I...I...I

also use Taglish but I say it very normal...when you speak in Taglish, you know...for me...when you speak in Taglish... “parang pangit sa akin eh”, I do not like it. O.A.
(laughter))

Pn4にタグリッシュに対する否定的な評価はあるが、そこから「なるべく使わない」といった調整計画にはいかず、「普通に（自分の許せる範囲で）使う」といった調整計画とその実施を行っている。タグリッシュはPn4にとって言語管理の対象となっているが、その否定的評価から行われる管理プロセスは弱くて消極的なものであると思われる。

今回の調査対象者については、タグリッシュについては全員がその存在を認識していたが、個人のレベルに関して言語管理の対象としている場合とそうでない場合が見られた。評価の段階ではそれぞれが個人として肯定もしくは否定的評価を行っていたが、否定的評価を行っている場合も、タグリッシュを使用しないという方向の調整計画にはいかず、否定的評価を行っていても（許せる範囲で）タグリッシュを使用するという方向性を持っていることが特徴的だと思われた。

4. 席次における個人言語管理とその管理プロセス

今回の調査について言えば、個人が地域の英語に対して席次管理、すなわち個人言語管理を行っていることが、具体的に示されたといえる。シングリッシュ、タグリッシュについてはその存在を調査対象者全員が認識していたが、マレーシア英語については個人によって認識に差が生じていた。この点から考えると、英語に関しては、シンガポールやフィリピンではすでに普及の段階を過ぎ、それぞれにシングリッシュやタグリッシュという英語のバラエティも登場していて、その存在は各個人にも十分に認識されていると思われた。シングリッシュやタグリッシュは個人の席次についての言語管理の対象に十分なり得る存在であり、実際に対象となっていると言えよう。この背景には、国・政府レベルの英語に対する言語管理がある程度まで進んでいることが考えられよう。

一方、マレーシアでは英語に関して国・政府レベルでの言語管理が弱く十分に確立されていないために、まだ英語は普及の段階の途中である。したがって英語の管理についても席次における管理（席次管理の対象となるほど地域の英語が確立している）と言うよりも、語尾が違うなどといった正規の英語に対する実体管理に近いと思われた。そしてマレーシ

ア英語については、まだその席次について言語管理の対象となり得る存在になっているとまでは言えないだろう。

さらにシンガポールとフィリピンについて言えば、英語のバラエティに対する態度が異なっている。シンガポールでは、シングリッシュをシンガポールの文化であるとして肯定する態度がある一方で、話す場面（相手、場所など）については共通の規範が見られ、個人言語管理が調整計画の実施の段階まで行われていると思われた。またシングリッシュと一般的な英語とを明確に区別する発言も見られた。このような個人の態度は、シンガポールの国・政府レベルが行っている言語管理の影響が考えられると同時に、個人としても積極的で強い言語管理を行っていると見えよう。一方フィリピンでは、評価の段階ではタグリッシュを肯定する個人もどちらかと言えば否定する個人もいたが、否定する個人も強い調整や否定の方向への調整を行ってはいない。またタグリッシュと一般的な英語との役割の差などが明確に認識されているかも不明であった。このようなタグリッシュに対する寛容な態度は、国・政府レベルでのフィリピン語やコードスイッチに対する言語管理が弱く、マスコミなどでもタグリッシュが使用されていることに影響を受けていると思われ、国・政府レベルの言語管理が非常に強力で個人にもその影響が及んでいると考えられるシンガポールとの大きな違いであると言えよう。

5. おわりに

シンガポール、マレーシア、フィリピンで行ったインタビュー記録から、実際に個人が行っている言語管理とその管理プロセスの例を挙げてきた。今回の調査対象者については、その多くが個人のレベルで席次（及び実体）に関する言語管理を行っていることが確認されたと言える。そしてそれぞれの個人は、地域の英語に関しての規範を持っていること、その規範に照らして問題の認識・評価などの対応を行っていること、そしてその対応については管理プロセスの形でその一部を明らかにすることができたと思われる。何を問題とするかは個人によって違いが見られたが、個人が言語の席次について確かに規範を持ち、問題が生じた際には、時には調整計画や調整計画の実施といったプロセスに至るまで積極的に実行していることは、社会全体のなかで、個人がどのような立場をとっているかを明確に表していると言えるだろう。同時に、調整計画の実施まで至る積極的な個人言語管理が、他のレベルの言語管理に影響を与える可能性を示唆しているとも言えよう。

今後の課題としては、このような個人言語管理について席次管理に限らず実体管理、習得管理など他の管理についてもさらにデータ収集をすすめていくこと、また調査者や調査時期、場面などによって変化する可能性をどのように考慮していくか、などが挙げられる。これらの課題も含めて今後も個人言語管理についてより明確にし、また他のレベルの言語管理も含めた大きな枠組みのなかで、その意味を考えていきたい。

注

- 1) 本稿は、石田(2006)のうち、個人言語管理の席次管理から英語に関する一部分を取り上げ、地域の英語に対する個人言語管理に焦点をしばって考察したものである。個人言語管理の詳しい概念、類型等などについては石田(2003, 2006)を参照されたい。
- 2) 個人言語管理の類型については、席次管理、実体管理、普及管理については渋谷(1992: 159-160)を参考とし、習得管理についてはCooper(1989: 33-34)を参考として独立した項目として取り上げた。他の2つについては石田(2003: 200, 2006: 12-13)からである。なお、石田以外では、それぞれ席次計画、実体計画、普及計画、習得計画となっているが、本稿では席次管理、実体管理、普及管理、習得管理で統一している。各管理には、他のレベルからの管理に対する対応も含まれる。
- 3) たとえば本研究で対象地域としたシンガポールにおける Afendras and Kuo (1980)、岡部(1984)、藤田(1993)、太田(1997)、Gopinathan (eds.) (1998)、マレーシアにおける Asmah(1979, 1982, 1987)、萩原(1987)、Karim(1987)、フィリピンにおける Gonzalez(1984)、大上(1997)、小野原(1998)、河原(2002)などである。
- 4) Kaplan and Baldauf (1997: 55)によれば、言語計画という枠組みの中では、教会関係者など一部の指導的立場にある特別な個人のみが対象となっている。
- 5) 言語計画(政策)は国・政府レベルだけでなく、団体、会社、学校家庭、個人などの各レベルなどでそれぞれに行われ、またそれらのレベル間でも相互に影響し合っている(ネウストプニー 1995: 76-79, 1997: 29-30, Kaplan and Baldauf 1997: 49-57, 石田 2003: 217)と言える。
- 6) アジアの英語については本名(1990)などに詳しい。
- 7) マレーシアについては、当初はシンガポールでの質問と同じくマレーシア英語を話すか、マレーシア英語をどう思うかという質問であったが、よく理解されないようであったため、途中からマレーシア英語があると思うかという質問に変更している。
- 8) Neustupný(1989: 211-212)では、イディオムを一定の規則を持った語り方、すなわち個人個人の言葉遣いとしている。本稿での「言説」はこのイディオムと同義である。
- 9) 管理プロセスは言語管理理論の大きな特徴である。詳しくはネウストプニー(1995: 78-79)などを参照。

参考文献

石田由美子(2003)「ディスコースから見た政府の役割に対するシンガポール人の個人言語管理」宮崎里司／ヘレン・マリオット編『接触場面と日本語教育』197-219 明治

書院

- ー (2004)「イディオムと深層管理」村岡英裕編千葉大学大学院社会文化科学研究科研究プロジェクト成果報告書第104集『接触場面の言語管理研究 Vol.3』193-207 千葉大学大学院
- ー (2006)『多言語状況下における個人言語管理ーシンガポール、マレーシア、フィリピンの場合ー』桜美林大学大学院国際学研究科博士論文
- 大上正直 (1997)「フィリピンの言語政策」小野沢純編著『ASEANの言語と文化』47-72 高文堂出版社
- 太田勇 (1997)「第4章 シンガポールの言語と文化」小野沢純編著『ASEANの言語と文化』109-139 高文堂出版社
- 岡部達味 (1984)「シンガポールの二種言語政策」土屋健治・白石隆編『東南アジアの政治と文化』〔国際関係論のフロンティア3〕187-212 東京大学出版会
- 小野原伸善 (1998)『フィリピンの言語政策と英語』窓映社
- 河原俊昭 (2002)「第3章フィリピンの国語政策の歴史ータガログ語からフィリピン語へー」河原俊昭編著『世界の言語政策 多言語社会と日本』65-97 くろしお出版
- 渋谷勝己 (1992)「第9章 言語政策」『社会言語学』159-183 おうふう
- 中村良廣 (1990)「第5章シンガポールの英語」本名信行編『アジアの英語』95-118 くろしお出版
- ネウストプニー、J. V. (1995)「日本語教育と言語管理」『阪大日本語研究』7 67-82 大阪大学文学部日本語学部講座
- ー (1997)「言語管理とコミュニティ言語の諸問題」古川ちかし訳『多言語・多文化コミュニティのための言語管理ー差異を生きる個人とコミュニティー』21-37 国立国語研究所
- 萩原宣之 (1987)「マレーシアの新経済政策と政治・経済変動」『国際政治』第84号ーアジアの民族と国家ー 136-152 日本国際政治学会編
- 藤田剛正 (1993)「第3章 シンガポール」『アセアン諸国の言語政策』95-136 アジア文化叢書7 穂高書店
- 本名信行編著 (1990)『アジアの英語』くろしお出版

Afendras, E. A. and Kuo, E. C. Y. (1980). *Language and Society in Singapore*. Singapore

University Press

Asmah Haji Omar. (1979). *Language Planning for Unity and Efficiency*. University of Malaysia

— (1982). *Language and Society in Malaysia*. Percetakan Dewan Bahasa dan Pustaka

— (1987). *Malay in its Sociocultural Context*. Ministry of Education

— (2000). Managing languages in conflict situation: A special reference to the implementation of the policy on Malay and English in Malaysia. In *Journal of Asian Pacific Communication -Special Issue Language management and Language problems Part I.*, Jernudd, B.H. (ed.), 239-254. John Benjamins Publishing Company.

Cooper, Robert L. (1989). *Language planning and social change*. Cambridge University Press.

Gonzalez, Andrew FSC. (1984). Evaluating the Philippine bilingual education policy.

In *PANAGANI*, Andrew Gonzalez, FSC (ed.), 46-65. Linguistic Society of the Philippines.

Gopinathan, S., Pakir, A., Ho Wah Kam & Saravanan, V. (ed.). (1998). *Language, Society and Education in Singapore -Issues and Trends- Second Edition*. Times Academic Press.

Kaplan, Robert B. and Baldauf, R.B. Jr.. (1997). *Language Planning From Practice to Theory*. Multilingual Matters Ltd.

Karim, Nik Safiah. (1987). Bahasa Malaysia and the Language of Advertisement. In *National Language and Communication in Multilingual Societies*, Asmah Haji Omar (ed.), 315-325. Ministry of Education.

Neustupný, J.V. (1989). Language purism as a type of language correction. In *The politics of language purism*, B. H. Jernudd and M. J. Shapiro (ed.), 211-223. Berlin and New York, Mouton de Gruyter.

Pascasio, Emy M. (1984). Philippine bilingualism and code-switching. In *PANAGANI*, Andrew Gonzalez, FSC (ed.), 122-134. Linguistic Society of the Philippines.

(フィリピントリニティ大学大学院)